

病院におけるアート活動におけるユーザー参加の意義

名古屋短期大学 保育学科 准教授 高野真悟



1. 病院におけるアート活動とは

日本の病院において絵画や写真などのアート作品の展示や楽器の演奏など一般的に行われています。それらは病院の殺伐とした空間を多少なりとも和らげようとする施設の配慮だと思います。近年ではそれらの活動に加え、壁画などのアートやインテリアデザインにより病院のネガティブなイメージを払拭するような事例が見受けられるようになりました。これらの病院における療養環境に配慮したアートやデザインは患者のストレスを軽減し、気を紛らわせる効果が期待できます。

日本の病院におけるアート活動は1990年代から主に小児医療の療養環境において、子どもの患者やその家族に配慮する目的でアートが導入されるようになりました⁽¹⁾。

ここで言う「病院におけるアート活動」とは病床数20以下の診療所を含んだ医療施設において、患者とその家族や職員の不安を取り除き、癒しや気を紛らわせる目的で設置・実施されるアート作品（美術・写真・工芸）やパフォーマンスアート（音楽・演劇）やデザイン（建築・インテリア・ランドスケープ・広報デザイン）、造形ワークショップなど広く指す言葉として使用しています。

2. 筆者の活動

筆者は2011年から12年間、病院におけるアート活動で約30件のプロジェクトに携わってきました。病院におけるアート活動は病院各々、条件や体制が異なるためその都度、依頼者（医療施設）や共同制作者（建築設計者）とデザインの方針や進め方を協議し、大学生（毎回異なるメンバー）の調整役、及びデザイン提案、ワークショップの企画などの活動をしてきました。



左：富山県リハビリテーション病院・こども支援センターのエントランス

右上：ほその外科小児科のびのびひろば 右下：やまかわこどもクリニック診察室

今回はその中で子ども患者や病院職員、患者とその家族、大学生などを巻き込んで行ったアート活動を3つ紹介したいと思います。

3. 病院におけるアート活動の事例

3-1 「クリスマスinホスピタル」（名古屋市立大学病院）

1つ目の事例は、名古屋市立大学病院で2011年12月に実施した「クリスマスinホスピタル」というプ

プロジェクトです。既存の照明塔を利用して、プラスチック段ボールを格子状に組み、丸い穴を無数にあけたツリーを設置し、渡り廊下のガラスの壁面にもクリスマスにちなんだ絵をスノーパウダースプレーで絵を描きました。



左:アトリウムのツリー
右: 渡り廊下のガラス

その後、ツリーの穴に飾るオーナメントを子ども患者やそのご家族、アトリウムを通りかかった医師や看護師、利用者につくっていただきました。オーナメントは折りたたんだティッシュに水性ペンで絵を描き、滲んだ絵をラミネートして、その場でツリーにつけていくという内容です。

オーナメント作りは1階のアトリウムで患者や職員の方にその場で声をかけて作成しました。



左:ワークショップに参加する親子
中:ワークショップに参加する医療従事者
右:ティッシュの滲み絵

また、別日に病院と調整し小児病棟でも同じように行いました。看護師さんをお願いしてデイルームに小児患者を連れてきてもらい、そのご家族と共にオーナメントしました。

参加してくれた子どもは何回もやりに来る子どももいて、とても喜んでもらえました。3週間の入院生活を送る子どものお母さんからは、「外出できなくて退屈していたのでありがたい。」という言葉いただきました。このプロジェクトは新聞にも取り上げていただきました。



左：小児病棟におけるワークショップ



右：プロジェクトに関する新聞記事

また、新たに日を設けて学生によるピアノの弾き語りコンサートをツリーの前で開催いたしました。たまたま通りがかった患者の方がとても喜んでくれたのが印象的でした。

この活動の意義としては、患者や利用者が楽しんで参加してくれたこと、病気のことを少しでも忘れられる時間が作れたことのほか、作ったものが大きなツリーの一部となることで参加者に満足感を与えることができたと言えます。さらに言えば、病院への親近感やクリスマスのワクワク感の創出、会話のきっかけづくり、その場の患者さんと学生の交流など、さまざまな意義があったと言えます。

参加してくれた学生からも有意義な時間を過ごすことができた、喜びの声が聞かれました。



左：ツリーの側で行われたピアノ弾き歌い

右：学生（お手伝い）と記念撮影



3-2 「みんなでつくるサインとアート」（名古屋市立大学医学附属東部医療センター）

2つ目の事例は、2019年に名古屋市立大学医学附属東部医療センターで、「みんなでつくるサインとアート」というプロジェクトを行いました。病院職員の皆さんに壁画のデザインなどワークショップなどで検討していただき、実際に壁画を描いたり、木工オブジェの作成をしたりしました。

当該病院は新築のタイミングで、建築設計者がサインを考える際に何かやりたいというお話を、当時所属していた研究室にいただき、筆者がデザインとファシリテーターを担当しました。

この事例は多業種からなるアート検討チームを結成してプロジェクトを推進していったのが大きな特徴かと思えます。そのプロジェクトチームは、病院整備室、名古屋市立大学、病院スタッフ（医師、看護師）、建築施工者、名古屋市営繕部、建築設計者からなります。



1Fメイン廊下のアートの様子

病院職員向けの説明会を行い、壁画のアイデアを募集して、イラストのデザイン、柱のデザインなどに反映しました。そして壁画ペイント、木工のヤスリ掛けと色塗りをしていただき、40名以上の職員の方に参加していただきました。また、壁画のワークショップは病院職員だけでなく、一般人の方、子ども連れの親子、看護学生まで様々な人に参加していただきました。



左：壁画ワークショップの様子

右：参加する子どもの様子

木工オブジェは病棟を建てる際に伐採した桜の木を再利用しました。木材をカットするとバリが出るので、それを紙ヤスリでひたすら磨いていただくというような作業も、病院職員にさせていただきました。磨き終わったオブジェの側面に色を塗るワークショップは気軽に参加できるので、入院患者さんや病院長、建築設計者の方にも参加していただきました。色を塗ったらサインかが書けるということでみなさん喜んでサインを残していました。



左：伐採した桜を利用した壁面オブジェ

右：色塗りワークショップに患者が参加している様子

下：2F廊下のアートの様子

参加した直後に職員に対してアンケートを行いました。「参加して楽しかった？」には、ほとんど肯定をいただきました。「日々の楽しみになった」40%、「職場に愛着が湧いた」71%、「参加した事を話したくなった」70%弱。「交流のない職員と会話できた」60%弱、「他の職員と関係が深まった」40%、「また参加したい」85%、「ヘルスケアアートにより興味が湧いた」74%から肯定されました。

業務に関しては「参加後、仕事がしやすくなった」80%、「働きがいが高まった」、「仕事のモチベーションが向上した」、「参加後積極的な姿勢になった」はいずれも3割弱で肯定されました。「今

後も継続して働きたいと思った」4割、「患者に対して優しくなれた」18%、「ヘルスケアアートで患者と会話できた」4割ぐらいが肯定しています。3割以上にポジティブな回答が見られました。

医療環境に関しては「職場が快適になった」8割弱、「病院の雰囲気良くなった」9割、「場所がわかりやすくなった」3割、「階数がわかりやすくなった」3割、「西棟・東棟がわかりやすくなった」6割などの場所の認識を助けるとか、雰囲気が良くなったなどの回答がなされました。以上のことから、5つの効果が見られました⁽²⁾。

- ①環境にリラックスや安堵感をあたえ、気分を明るくする
- ②場所の認識を助ける
- ③楽しみながら職場への愛着を増加させる
- ④約4割で職員同士、職員と患者の交流を促進
- ⑤約3割弱に職務の積極的な姿勢の喚起

3-3 「子どもと作る壁面装飾」（ひたちの晴嵐呼吸器内科）

3つ目の事例は2023年3月に茨城県牛久市「ひたちの晴嵐呼吸器内科」（写真1）の開院に合わせてアート活動を導入したものです。名古屋市立大学の学生10名と筆者が現地で7日間かけて活動を行い、筆者はデザインと制作、施工管理を担当しました。

このプロジェクトの主な内容は屋外エントランス空間における動物彫刻の設置、1階キッズスペースの壁面ペイント、処置室の壁面と天井のペイント、CT室・職員トイレ・階段室・職員休憩所・院長室の壁面ペイントで、患者のためだけでなく、働くスタッフのためのアートも多いのが特徴です。

壁面や天井のペイントにはプロジェクターを使用しデザイン画を投影しながら下書きをした後にアクリル絵具を使用しペイント作業を行いました。絵具の塗装方法は筆で描く方法とスポンジを使って押し付けるように描く方法と2種類で描きました。



左：C T検査室の壁面ペイント（筆で彩色）の様子



右：職員休憩室も壁面ペイント（スポンジで彩色）の様子

また、それらのペイントに加え壁面にデザインに合わせてカットしたベニヤ板に「ポーリングアート」の技法を用いて塗装したものを壁に貼り付けました。「ポーリングアート」とは複数色混ぜ合わせた絵の具をキャンバスに流し込むことで綺麗なマール模様を作り出す技法で、たらし込みとも言います。以下には院長先生のご子息2名と共に作った壁面装飾について2つの方法で行ったものを紹介いたします。



出来上がったポーリングアート

① ポーリングアートによる壁面装飾

丸く切り抜いた様々な大きさのベニヤ板に両面テープで取手をつけたものをキャンバスとして、ポーリングアートを子どもA（6歳男児）・B（3歳男児）とそのご家族、合計5名に体験してもらいました。出来上がった作品は院長室の壁面に貼り付け惑星のイメージの装飾となりました。ポーリングアートの絵具はアクリル絵具と洗濯糊を1：1で混合したものです。粘性を増すことで色が混ざりにくく絵具が流れ落ちにくくなります。参加者は順番にポーリングアートを行い、子どもたちは何度も繰り返し楽しむ様子が見られました。

参加者の作品は十分に乾燥させて、院長室の壁面に両面テープとボンドで貼り付け、宇宙の中の惑星に見立てました。作成した作品が壁面に飾られると、子どもが満足げに喜ぶ姿が見られました。



子どもがポーリングアートに取り組む様子

② スポンジによる壁面ペイント

院長室の壁面のある一部の領域に円形の塗装部分を設定し、マスキングテープで円形の領域を囲い、その内側にスポンジを利用して子どもA、Bに好きな色のアクリル絵具で自由にペイントしてもらいました。この壁面は宇宙をテーマにしており円形の領域は地球をイメージしていることを事前に子どもたちに伝えました。

大きな壁面に自由に絵を描くことは、子どもにとって楽しい活動であった様子(写真5,6)でした。汚れても良い服装で思い切り画面に好きな色を塗り、とりわけB(3歳男児)は手が絵具で汚れることも気にならなくなり、夢中で色を塗る経験は貴重であったと予想できます。はみ出してしまった絵具もロケットに見立て、「見るたびに、皆さん・わが子と一緒にアートに参加させて頂いた日を思い出して楽しい気持ちになる」とアンケートで感想をいただきました。

今回は院長先生のご息とご家族の造形活動を壁面装飾に活用した事例でしたが、ポーリングアートとスポンジや身体による描画の表現活動を通して親子で楽しむ様子やイメージを膨らませながら絵具を塗る様子を見ることができました。



スポンジによる壁画に取り組む様子

これらの活動を経て、半年後にアンケートを実施しました。予想できない色の混ざる様子に感動し、作品と一緒に作る経験や飾られた環境を通して、空間に愛着と親しみを持ったというご意見をいただきました。また、院長先生、ご息ABとご家族の満足度も高かったことが明らかとなり、子どもと共に行う表現活動を壁面装飾に活用することは、楽しかった記憶と共に保存され、唯一無二の愛着の持てる空間の創出に有効であることが示されました。

今後、このような活動は医療施設のエントランスや待合いなどの共用スペース、病棟など広く展開が見込まれる一方で、保育施設や児童養護施設などの子どもに関連する施設での普段の造形活動、竣工記念や創立記念などの特別な活動の展開など幅広い可能性が見込まれるのではないのでしょうか。



子供たちが完成を喜ぶ様子

4. まとめ

以上、3つの事例を見てきますと病院におけるアート活動は療養環境の不安を和らげることができる実感しておりますが、それだけではなく作る過程でユーザーに参加してもらうことで様々な良い効果が生まれることがわかってきました。手伝ってくれた学生にとっても貴重な経験となり、就職面接試験の時に話げできた、ポートフォリオにまとめることができた、など有意義な経験になったようである。また大学にとっても地域貢献につながることから、今後も名古屋短期大学の学生を含め、色々な方を巻き込みながら活動を続けていこうと思います。

参考文献

- (1) 山野 雅之：病院におけるヒーリング・アートデザイン学研究特集号 7(4), 66-71, 2000
- (2) 高野真悟：「子どもの療養環境におけるヘルスケアアートの実践とその意義」, 名古屋短期大学研究紀要59, pp. 123-135, 2021